

沼津市若山牧水記念館

第43号

2009. 9. 10

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

若山牧水の歌集

第二歌集『獨り歌へる』



高橋希人氏から寄贈された
第二歌集『獨り歌へる』

牧水の第二歌集『獨り歌へる』は、明治四十三年一月一日に名古屋の「八少女会」から発行された。幅十六cm、高さ二十四cmの大判のアンカット製本で、質素ながら親しみのある歌集である。明治四十一年四月から四十二年七月までの五百五十一首が収められている。

「八少女会」とは、名古屋市と合併したばかりの旧熱田町の鷺野飛燕等七人と名古屋市の尾崎久弥が加わって、明治四十一年三月に短歌雑誌『八少女』を刊行した青年歌人たちの結社で、編集発行人の鷺野飛燕の妻・和歌子が最年長で二十七歳というから、いかに若々しい会であったか想像されよう。短歌雑誌『八少女』は、当時としては珍しい短歌だけを載せる文芸誌で、明治四十四年三月まで隔月で刊行された。牧水は、第二号から作品を発表して同人として参加している。

『獨り歌へる』の発行を八少女会が計画した縁であろうか。明治四十二年七月発行の『八少女』の「編輯局より」には、同会の事業として『獨り歌へる』を発行することにしたとあり、一ページを使って広告を掲載している。また、別の号では、印刷所の都合で『獨り歌へる』と『八少女』の発刊が遅れたが、同会の倦怠や無責任からではないと釈明している。

『獨り歌へる』の冒頭の歌は「いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや」で、末尾の歌は「わがこゝろ静かなる時につねに見ゆ死といふものゝなつかしきかな」である。牧水は第一歌集『海の声』以降の歌を歌集にまとめることによつて、苦しかった恋に結末をつけ、出直そうとし、第二歌集に大いに期するものがあつたと思われるが、限定二百部という発行部数では世に問うに難く、残心の発刊ではあつたろう。しかし、このことがやがて、『海の声』と『獨り歌へる』所収の歌の大部分に新作を加えて編んだ第三歌集『別離』を東雲堂書店から発刊するエネルギーになつたのではないかと考えられる。

『獨り歌へる』の初版本は、昭和六十二年の当記念館の開館に際して、牧水と親交の深かつた横須賀市の医師高橋希人氏から、牧水の「幾山河…」の半切、「最後の手紙」等とともに寄贈された。表紙は日焼けし、多少痛んではいるが、氏の愛読された痕跡が色濃く残っている大変貴重なものである。なお、『獨り歌へる』の初版本の所在の分かっているところは極めて少なく、国立国会図書館、若山牧水記念文学館（日向市）、蓬左文庫（名古屋）だけであるが、このたび、本会では、新たに入手できた。流通の経緯は不明だが、一部補強されているものの、自作の外箱に入れられて大切に保管されていた様子がうかがえる。

（須永 秀生）

牧水と麦畑

香川ヒサ



英国スコットランド トローザック地方の風景

一昨年の初秋、英国スコットランドのトロローザック地方にあるバルクヒダーの谷を歩いた。川のような二つの湖が連なる細長い谷である。一八〇三年九月、詩人ウィリアム・ワーズワースは妹のドロシーと山を越えてこの谷へ下り、

その想い出をもとに名高い詩『The Solitary Reaper (ひとり麦刈る乙女)』を書いた。四節から成る詩は、(田部重治訳)

ただひとり畑中に、
ただひとり刈りつつ唄う、
かの寂しきハイランドの乙女を見よ、
足を止めよ、さもなくば静かに行き過ぎよ。
ただひとり刈りては束ね、
かくしては悲しき歌うたう。
おゝ聴けよ、深き谷間は、
その声に充ち溢れたり。

から始まり、やがて丘を登ると声は聞こえなくなるが、
遙かのちまで、
その歌声は心に残りぬ。

と結ばれている。旅の孤独な心を揺さぶった独り麦を刈る少女を懐かしく思うという詩である。そして昨年、若山牧水の短歌を読み返していた時、『独り歌へる』所収の

水無月の洪水なせる日光のなかにうたへり
麦かり少女



という一首を見て、おやつと思つた。

牧水が愛読した『武蔵野』の作者・国木田独歩は、ワーズワースへの傾倒を『小春』(岩波文庫『武蔵野』所収)で書いている。そこで、もしやワーズワースのこの詩と牧水の接点もあるかも知れないと思ひ、当たってみた。

ところが、牧水がワーズワースについて述べているのは、『若山牧水全集』(増進会出版社)で見た限りでは、『カツクーを聴く』(明治四十二年『全集』第三巻)に、『四五年前学校の教室で坪内先生にウオーズワースの作『カツクーへ与ゆる歌』とかいふのを教はつたことが

岩波文庫 国木田独歩『武蔵野』
田部重治選訳『ワーズワース詩集』

ある。」とあるのみであった。早稲田大学での坪内逍遙の講義については、日記（明治三十七年）でしばしば触れられていて、

十一月二十九日 曇

坪内先生の「英詩文評釈」といふより、テニソンのドラなど読み行きぬ。

という一文を見付けた。（『全集』第二巻）

国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで見ると、明治三十五年六月東京専門学校出版部から、逍遙の講義録として『英詩文評釈』が出されている。その「評釈の六」に「ウォオツヲオスの抒情詩」があった。「呼子鳥に」「幼時を憶うて不死を知るの歌」の二作品の読解がされていて、「口ひとり麦刈る少女」は他の作品と共にそのタイトルだけ紹介されている。従って、牧水は「口ひとり麦刈る少女」という詩のあることは知っていたと思われる。が、作品を読んでいたかどうかはわからない。また、『独り歌へる』には、「麦かり少女」に先立って、

秋かぜは空をわたれりゆく水はたゆみもあらず
葦刈る少女

足とめて聴けばかよひ来河むかひ枯葦のなかの葦刈りの唄

の歌がある。「麦刈る」と「葦刈る」の違いはあるが、仕事に精を出す少女の歌声に耳を傾け、しかし直接に接することはないという設定は、ワーズワースの詩と同じである。けれども、や

はりこれだけではワーズワースの詩と牧水の歌を結びつけられないだろう。むしろ、万葉集では「玉藻刈る」が「をとめ」の枕詞であるから、万葉集に多くを学んだと述べている牧水にとつて、「刈る」と「をとめ」が結びつくのは自然だったとも思えるのである。しかしながら、何故「麦かり少女」なのかどうしても気にかかる。

当時の日本の農村風景と言え、稲田を目にするのが多かったのではないだろうか。そこで、改めて麦畑に関わる牧水の歌、文章を探してみることにした。

牧水は紀行文を沢山書いており、その中には目にした風景として、麦畑がしばしば登場するが、同時にまた水田や豆畑、桑畑、黍畑、茄子畑、菜の花畑、蜜柑畑、桐畑、ダリア畑、陸稲畑等さまざまな畑も現れる。そこで、麦畑について特別に言及した文を探すと、次のような文に出会った。

その一つは、明治四十年の（六月十三日、牛込南系のき町一七小倉方より、鹿児島市、鈴木財蔵様）という手紙で、『全集』第一巻「書簡」

十九日、晴れ、ばと祈つてる、そしたら僕は一日野を彷徨うつもりだ、一人ではないが、恋でもない、美人でもない、たゞ憐れな運命の裡に住んで居るあはれな女性だと思つて、くれたまへ、麦黄ばみ水無月の雲の白く重く垂れか、つた平野をどんな姿で歩くだらう、自ら想ふに忍びない。

と、述べている。「女性」は園田小枝子。牧水は、恋人を歩かせるのに相応しい場所として黄色くなった麦畑の続く野を想像しているのである。

また、大正四年の（五月二十八日、相州三浦郡下浦村より、東京府、和田直衛様）という手紙では、『全集』第五巻「書簡」

海岸に次第に夏がふけてゆきます、私のゐる家から表の往来（それをこえて海）に出るまで一丁がほど麦畑の中に細い砂の路がついてゐるのです、そこを毎夕徳利さげて通ふのですが、それが今日はもう刈り始めました、じいつと見つめてゐて何とも言へぬさびしさを感じました、

と述べていて、牧水が、麦刈りの情景に激しく感情を動かされていたことが知られる。



増進会出版社刊『若山牧水全集』



『海より山より』

さらに紀行文『海より山より』の「その後—その五」（『全集』第六巻）に、

私は黄金の波の打ち渡つてゐる稲田の原を見渡すよりも、其処の畑彼処の片岡に静かに穂を垂れてゐる麦の秋を眺むることを好みます。何といふことなく親しみと柔みとを覚えます。

とあつた。牧水は麦畑を好ましく思つていたのである。

そして、大正五年十月「早稲田文学」に載せた小説『麦の秋』では、先行きの不安を思い悩んでいた主人公の「彼」が、さくさくという鎌の首で我に返つた一瞬、目に映つたのが麦畑で麦を刈る男となつてゐる（『全集』第五巻）。

彼の寝てゐる藪のあちら側はすぐなだらかな登り傾斜の畑となつてゐて、黄色く実つた麦を一人の男が刈つて居るのである。

内面に深く沈み込んでいた「彼」の精神が動

き出すまさにその時に、精神に刻まれた情景として麦畑が描かれている。

以上の文章から思つたのは、牧水にとつて麦畑とは、その精神が始動する時に現れる原初的な風景、少なくとも海や山、溪谷などと共にその一つではなかつたかということである。

では、牧水はそんな麦畑をどのように歌つてゐるのか、歌を読んでみたい。

はつ夏の雲あをそらのをちかたに湧きいづる屋麦の笛吹く 『独り歌へる』・『別離』

水無月の洪水なせる日光のなかにうたへり麦かり少女

麦の穂の赤らむころとなりにけりひと棄てしのちのはつ夏に入る

麦畑のなかにうごける農人を見つゝなみだしづかにくだる

麦畑に関わる歌は、『黒松』の十五首が一番多く、次いで、『独り歌へる』・『別離』の十三首である。一、二首目は、『和歌講話』（大正六年『全集』第六巻）の「夏のうた・初夏」に、

ふつと眼を移して杳かの地平線の方を見ると、もう其処にはまるきり春に見られぬ色や形や匂ひを草めた雲の姿が動きそめてゐる。おゝ、夏が来た、と思ふ其時のこゝろもち、それを私は限りなく愛するものである。

という言葉と共に引かれている。三首目は、小



若山牧水『和歌講話』

枝子と別れた後の初夏の歌、愛する人のいない愛する季節に寂しさは一層募るのである。四首目は、風景としての農人に一体感を感じている。国木田独歩の『忘れえぬ人々』の主人公のような孤独で内面的な状態にあつたことがわかる。

初夏の雲のなかななる山の国甲斐の畑に麦刈る子等よ 『路上』

遠山のうすむらさきの山の裾雲より出でて麦の穂に消ゆ

酔のごとき入日に浮む麦の穂の穂さきかなしや摘まむと思ふ 『死か芸術か』

一、二首目は、「六月中旬、甲州の山奥なる某温泉に遊ぶ。当時の歌二十二首」の歌で、雲も山も麦畑も麦刈る子等も悠然たる旅の風景なのである。三首目は、悲しみや悔しみ、言いようのない感情の極みに眼に映つた麦の穂、それに触れて辛うじて自己を支えている。

棕栢の葉の菜の花の麦の麦のゆれ光り揺れひかり永きひと日なりけり
 『砂丘』
 麦畑の熟れし片すみ野いばらのかけの小川にけふも来にけり
 砂畑に麦は芽ぐみつ畏みてその瘦麦に肥料やる海人は
 『朝の歌』



第 11 歌集『さびしき樹木』

大正四年、牧水は喜志子の転地療養のため三浦半島へ転居した。一、二首目で風景として歌われた麦畑が、生活するうちに三首目のような現実的な情景になってしまったのだ。

麦畑のくろにならべる四五本の桃のわか木に実のなれる見ゆ
 『さびしき樹木』
 なだらかに海へくだれる片岡の麦生あをみて木枯の吹く
 『溪合集』
 川ばたの並木の桜つらなめてけふ散りみだる麦畑のかたに
 『くろ土』

これら三つの歌集には旅で出会った風景が多く歌われていて、水田、枯田、冬田や桑畑、黍

畑、茄子畑、ダリア畑等の田畑が出て来るが、麦畑の歌は他に一首あるのみで、しかも麦畑そのものを歌っているのは二首目だけである。風景を見たままに歌った結果なのだろう。

麦の穂にをりをりをさはりゆく路に月のさしゐてころかなしも
 『山桜の歌』
 麦を踏む背高き叟の頬かむりひねもすを居る其処の麦田に
 麦畑のひとつところ風の吹きたてば夕日は乱るその穂より穂に

一首目は「吾子富士人」の歌。次男誕生の喜びを客観化しているのが麦の穂である。二首目は「土肥温泉にて」、三首目は「大野原の初夏」の歌。「大野原の初夏」には麦畑の歌が三首ある。

麦畑のうね間の瓜はみのりたり麦も刈るべくいま色づきぬ
 『黒松』
 熟麦の穂波がうへに小ばしりにゆく帽子見ゆ小学生の帽子
 麦の穂の風にゆれたつ音きこゆ雀つばくら啼きしきるなかに
 麦の穂のうつくしきかも麦の穂のこの熟れぬるを持ちつつ見れば
 熟麦のうれとほりたる色深し葉さへ茎さへうち染まりつつ

一首目は「朝の散歩」の歌。二首目は小学生に麦畑を、三首目は雀と燕に麦畑を組み合わせ

ている。小学生は旅人か、みさきか。また、牧水は鳥が好きだった。対象への愛を麦畑によって客観化している。四、五首目の麦の穂に向けて牧水の眼差しには、「限りなく愛する」気持ちを感じられるのではないだろうか。

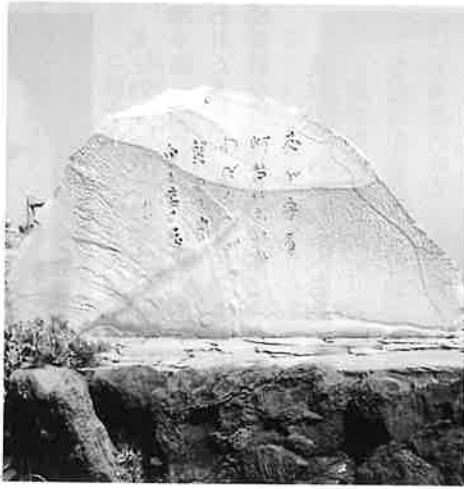
結局、麦に関わる歌は重複する歌を除くと全作品中に五十三首しかなかった。けれども、こうして読んでみると、やはり牧水にとって麦畑は特別のものであったと思えるのである。

〈筆者プロフィール〉かがわ ひさ



一九四七年横浜市生れ。お茶の水女子大学国文学科卒業。七〇年森本治吉主宰の「白路」に入会。中断を経て、一九九五年よみうり文化センターの短歌教室で米田登主幸の「好日」に入会。九三年同人誌「鱧と水仙」創刊、発行人。第三四回角川短歌賞、第三回河野愛子賞、第一二回若山牧水賞受賞。歌集に『テクネー (TECHNE)』(角川書店)、『マテシス (Mathesis)』、『ファブリカ (fabrica)』(いずれも本阿弥書店)、『パン (PAN)』、『モウド (MODE)』、『パースペクティヴ perspective』、『香川ヒサ全歌集』(いずれも終書房)。短歌評論集に『アナリシス— (ANALYSIS)』(終書房)。現代歌人協会理事、日本文芸家協会会員。

燈台あはれく再生への転機 渡邊 紘



下田市恵比須島の牧水歌碑

下田市須崎御用邸の南西、海原を望む恵比須島の一角に、牧水歌碑が建てられたのは、昭和五年六月一日。染筆は牧水長男・若山旅人氏。友が守る燈台あはれわだ中の蟹めく岩に白く立ち居り

同年九月七日に行われた下田市歌碑建立発起人会主催の除幕式には、旅人氏が参列され、時世を経て牧水と神子元島(みこもとじま)のえにしが想起されたのであった。牧水歌碑に佇むと、渺茫と広がる海原は波浪揺れやまず、沖行く船のかすむ彼方に白い燈台が昼でも光る閃光を規則的に放っている。約十一キロ先の神子元島は、周囲二キロ、

高さ三二米の一木一草とてない赤茶けた岩礁である。潮流も早く船を寄せることも困難な岩の上に、わが国最古の洋式石造燈台が竣工したのは明治三年十一月のこと。基本設計、工事監督は共に英国人で、点燈式には太政大臣三条実美、参議大隈重信、大久保利通等の政府首脳、英国公使パークスや領事アーネスト・サトウが席を連ねたことが録される。伊豆の海に初めて光芒を放った燈台の建設は、開国日本を象徴する壮挙で、現存する最古の官設燈台として昭和四四年七月には国の文化財に指定されている。

船は五挺櫓漕ぐにかひなの張りたれど濤黒くして進まざるなり
船子よ船子よ疾風のなかに帆を張ると死ぬる如くに叫ぶ船子等よ
はたはたと濡帆(ぬれほ)はためき大つぶのしぶきと
び来て向かむすべなし
やうやくに帆に馴れ浪に馴れにつつこころ
ゆるめば海は悲しき

牧水が神子元島に渡ったのは大正二年十月二六日で、一週間の滞在であった。その折に残した歌八十一首は牧水の第七歌集『秋風の歌』に「秋風(あきかぜ)の海及び燈台」として収められた。加うるに、散文集『海より山より』(大正七年七月刊)

の中の「燈台守」及び散文集『樹木とその葉』(大正十四年二月刊)の中の「島三題」は、神子元島紀行ともいうべく、牧水の生涯の苦悶、どん底から再生への予感を彷彿たらしめるものがある。それにしても牧水は何ゆえにこのような岩島を訪ねる心境になったのだろうか。二十九歳の所帯持ちが、たとえ旧友の誘いであろうとも、行動には必ず何らかの誘因があるはずだ。

時の流れを前年まで尋ねてみると、明治四五年五月、牧水は信州の太田喜志子と駆け落ち同然の結婚をしたのだったが、その生活は甘い夢を楽しむどころではなかった。金策のために一日飛び廻り、自棄酒(やけ)を飲んでは、すぐごとと愛妻のねぐらに身を横たえ長嘆息するばかり。

そんな窮乏の折の七月、「父危篤(ちちいじく)すく帰れ」の電報が舞い込む。やつとの思いで旅費を工面して日向・坪谷の実家に着いたのは七月二五日。医師であった父・立蔵の病は中風であったが、牧水には急変しそうな気配は見てとれなかった。父と母くちをつぐみてむかひあへる姿は石のごとくさびしき

われを恨み罵りしはてに嘆(なげ)みたる母のくちもとにひとつの齒(は)もなき
しかるに、一度郷関(きょうかん)に入れば、「金にもならぬ和歌ばかり作つてゐて一体お前はどの若山家をどうする気か」とばかりに、歳とつた親戚や母から責められる。七月三十日に明治天皇が崩御されて、大正と改元になったが、牧水には何

することとてあろう。薄暗い部屋の二階で本を読んだり、ぼんやりもの思いにふける。そして近在を心中悶々暗転しながら散策するだけだ。

わがそばにこころぬけたるすがたしてとすれば父のきて居ること多し

一ところ山に夕日のさせるごとく東京の市街をおもひてぞ居る

快方に向かうかに見えた父であったが、十一月十四日にわかに急変、脳溢血によつて不帰の客となつてしまった。当然のことながら、父の死後は以前にまして、牧水は家郷を去りゆく名分を喪つてゆくのだが、事ある毎に思い出されるのは東京のこと、新妻のこと。というのも十月末の妻からの手紙には懐妊の知らせがあつた。出て行くか、留まるべきか、牧水は懊悩した。

歌集『みなかみ』所収の「黒薔薇」九十七首こそ、三十一文字を逸脱したり、語気荒く破調化して、その折の心象を映し出す。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみてたなびきて居り

と、帰郷してこれほどに情感ゆたかに詠つた牧水いざこ、その変貌はすさまじい。

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに

われ素足に青き枝葉の薔薇を踏まむ、かなしきものを滅ぼさむため

わが悲しきは青かりき、水のことかりき、火となるべきかはた石となるべきか

自分のこころを、ほんたうに自分のものにするために、たびたび来て机に座るけれど、眞黒な布で部屋を張りつめ、椅子も机も、服までも黒くしたい

大正二年五月、意を決して牧水は家郷を去つた。老母、親戚の同意はなんとかとりつけたものの、生活上の保証とてない賭けに違ひなかつた。上京の途上、愛媛の岩城島に友(三浦敏夫)を訪ねて同家に滞在中、第六歌集『みなかみ』の編集をしているが、清書してゆくうちに思つても苦しく、はては飯さえ食えなくなつて心身の変調を来たすあり様に、見かねた友は途中から清書を代わつた。

すでに前月、信州の妻の里には長男・旅人が生まれていた。東京に着くや小石川に一戸を借り受け、妻子を呼び寄せたのは六月の終わりで、ほとんど一年ぶりの再会となつた。かくて、新たな牧水が始まる、始まるはずであつた。文芸誌『創作』の復刊、歌集『みなかみ』の出版と、牧水の情熱は矢継ぎ早やに結実は見せたものの、この種の雑誌の常として売れ行きはよろしからず、牧水は行き詰まつた。妻子のためはもとより、生活のため、また自身の生き方のためにも、抛つて立つところに窮すれば、牧水は遠い他郷の空や海にあこがれる。いつものことだ。それは現実からの逃避かも知れない。牧水はふと早大時代の旧友、古賀安治を思つた。佐賀県の金満家の息子に生まれながら、大学を中退、帰

郷後、実家からもらった数万円で肥前平戸沖の小島を買い、牛や鶏の飼育業を始めたのだが、うまくゆかず売却して、一転、鮫夫になるような男だ。かと思つと、渡米したようだが、再び舞い戻つて来る。明治四二年、牧水が中央新聞の貧乏記者をしていた頃には、転がり込んできた古賀を下宿に引き取つて共同生活もした。それからの古賀はペンキ屋の弟子とか、市内電車の運転手を経て、何をどう思つたか、横浜の航路標識所に入った。

その古賀が今や燈台守になつて来遊を促して来る。古賀の生き様は破天荒かも知れないが、馬が合うというのか、憎めない。後年(昭和十四年秋)、下田の歌人、前田福太郎宅に滞留した古賀は「あまりの寂しさと酒欲しさに、また、荒海のこの孤独の暮らしを見せたさに、しきりに来島を促した」(『伊豆の自然』)と語っている。十月二十六日夜、牧水は尾山篤二郎らに見送られて、東京霊岸島から東京湾汽船(後の東海汽船)のゑびす丸(一九九トン)で下田に向かつた。寄港は沿岸づたいに熱海、網代、伊東、見高、河津浜を経て、下田に入港するというものであつた。下田に着いても風波は荒れ止まず、港の隅に集まつている碇泊船はありたけの帆を張つて久しぶりの日光に帆を乾かしている。二八日朝、燈台通いの船はようやく出航に至つた。米、炭、燐寸一包、玉葱、十個あまりの水樽等々、燈台守の生活物資が積み込まれる。そして、牧



神子元島灯台

水は古賀の新妻のために燃えるようなダリヤの一束を東京から持ち込んでいた。もとより妻・喜志子の心づくしである。下田では数本の酒壺をも買い込んだ。船は大きなうねりの中をまっしぐらに神子元島に向かう。

おほいなる岩のいただき黒蟻と見えつつ友はものを振りをり

むらだてる赤き岩岩飛びこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

驚くほどに老けて見える友と向かいあった時、友の眼は涙でいっぱいであった。険しい岩の上を並んで歩き出そうとすると、友は履いている草履を脱いで前に揃え、牧水の下駄と交換した。

相逢ひて言葉すくなき友どちの二人ならびて登る断崖

石づくり角なる部屋にただひとつ窓あり友と妻とすまへる

その窓にわがたづさえし花を活け客をよるこぶ若きその妻

友酔はず我また酔はずいとまなくさかづきははしこころを温む

ほぼ三年ぶりに相会う二つの心は思い余つて言葉にならない。一時間、二時間と飲み語つても昔の調子を取り戻せない、なんともならない隔たりに狼狽する心の流動がみごとに表れ、無邪気な新妻が印象的だ。そこへ帰港を告げにきた船頭に牧水はあらぬ言葉を発してしまう。「僕はおう暇しよう。そしてこの船でまた下田まで帰らう!」と。言い終わらぬうちに友は降りつけて来た。かくして寄り添う再会であった。

その日は、羽織袴で出迎えてくれた「台長や二人の台員、はてはその細君をも呼んで」酒宴ははてしなく続いたのであった。当時の燈台守は森熊吉首席以下四名で、古賀は大正元年九月二四日から大正三年十月三十日まで所属した。

牧水は、燈台の最上部、海上からは三十余丈、螺旋型の階段を登って、空中にポツンと、この世に隔絶したような宿直室で時を過ごした。その上には碧空を映すガラス張りの丸天井と石壁の円形の小部屋がある。そこからの景色を牧水は感動的に語っている。伊豆の中心をなす天城

山が濃く黒くどつしりと眼前に据わり、下田方面への白渦流れる狭い海と、三方にはるばると広がる大きな荒海、潮流のうえにくつきりと浮かぶ七つの島々。そして夜ともなれば燈台の灯をめぐって飛び来る鳥なども眺められる。荒天でもなければ眼下の怒濤の響きすら聞こえないこの小宇宙に、混濁と疲労した牧水の心身は解さほぐされて行くのだった。

友は牧水の現状を案じて、燈台守になることを勧めたが、牧水の自己省察は真剣であった。「自分は余りに今まで自分というものに期待し過ぎた。そしてそのため取り返しのつかぬ自分の生命を刻々に目に見えずして滅して行きつつあるではないか。」とも思う。明日は下田から便船がやつて来る。牧水は悲しく決意した。東京での生活に展望は見えないにせよ、自らの人生があるならば、何があるかと歩み出さなければならぬ。牧水の帰宅は十一月四日であった。

顔も蒼み人に餓えたる饑心地火の如き手をとりに合ひにけり

神子元燈台をはるかに見やれば、今から百年近くも以前に手と手を取り合った二つの晩春に、人間の本来が孤独であろうと、誰しも不思議と人なつかしい安らぎを覚えるに相違ない。

〔筆者プロフィール〕昭和十六年下田市生れ。高校教諭を経て県立下田北高校長。平成十四年三島高校長。本年五月同校退職。本学会員。